# 象を撃つ

井上光晴

象を撃つ

昭和四十五年六月二十五日　第一刷

定価　七五〇円

著者　井上光晴

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五―一二一一
郵便番号一〇二

本文印刷　理想社印刷所
オフセット印刷　凸版印刷
製本　中島製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1970 Mitsuharu Inoue　Printed in Japan

# 象を撃つ

BOOK DESIGN
A.D PHOTO／TAKAYUKI OGAWA
DESIGN／YOSSY INOMATA

ジョージ・オーウェルの「象を撃つ」物語にどうして私はこうも引きつけられるのだろうか。正直のところ、奥地ビルマのモールメインに派遣されたイギリス人警官が、殺すつもりのない象を撃ってしまう話を自分の書く仕事に関係しているなどとは、思ってもみなかったのである。ちょうど、その時、私のいちばん嫌いな患者が枯れかかった棕櫚の蔭からあらわれたので、折角、考えはじめていたことを中断しなければならなくなったが、黄色い縞模様のパジャマを着た、その虫の好かぬ患者は私に気づくと、小馬鹿にしたように忍び笑いを洩らした。

元水族館長だったと自称するその男も小説を書いていて、別の患者の話によると、何でも此処の療養所における蜘蛛の巣みたいに入りくんだ人間関係を主題にした連作だということであった。しかし、実際に文字としてそれが書かれているのかどうかについては、別の患者も確かな保証を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

得ることができず、単に言葉だけのはったりに過ぎないと私は睨んでいた。すると、私の呟いた否定的な言葉は忽ち元水族館長に伝わり、別の患者はまた現在推敲中の連作Fについて、微に入り細にわたってのストーリイをきいてきた。そして、あろうことか、私の名前を持ちだし、そういう作家がいたことなどきいたこともないし、もし活字にしたものがあるのなら、今すぐお目にかかりたい、という陰口を叩いたことまでもそのまま伝えるのだった。

別の患者の前身は釣堀屋の経営者で、名前を古市雪次という。彼が私と元水族館長に両天秤をかける蝙蝠であることは百も承知していたが、全く拒(しりぞ)けてしまうと、面倒なことになりそうなので、そのままにしているのだ。彼の口調は蝙蝠に似合わず、比較的にからっとしており、告げ口する場合も、まるで昼めしのメニューでも調べてきたとでもいうような喋り方をした。

あなたは自分を作家だと思い込んでいるだけだって。そういう病気なんだって唐増さんはいってますよ。医局の書類にもそんなふうに書いてあるらしいです。機密の書類だけれどもあの人は特別にコネをつけて、見たといっていました。

おもしろいね、それは、と私はいい返したが、もしかすると唐増吉雄は医局の内部にまで手をのばしているのかもしれなかった。私が想像力の技術者であることに間違いはないが、それを嫉妬している元水族館長が、医局の誰かに工作して、書類を作り変える可能性も充分考えられるのだ。

外気に触れる時間がまだ三十分余り残っているのを腕時計で確かめてから、私は棕櫚の方に歩きだした。枯れるというより、腐ったようなぶよぶよの赤黒い肌をあちこちにむきだした棕櫚は、ちょうど私が療養所に入った年の夏に植えられたものだが、それを知っている誰かが或は農薬のようなものを注ぎこんだのかもしれなかった。それにしても、なぜ私はジョージ・オーウェルの主人公の行動にひっかかるのか。そう、確かにそれは自分の生き方の問題だ。――そのころのぼくは象を撃つのがまるで殺人のような気がした。そのころのぼくは動物を殺すことを何ともおもっていなかったけれども、まだ象だけは撃ったことも撃ちたいと思ったこともなかった。それに持主のことも考えてやらねばならない。――この象を小説におき換えてみればよい。私はつねに状況の中核に身をゆだねねばならぬ作家としてドイツ製小銃の照準器に目をあてて狙いをつけるイギリス人警官の心の動きにまったく同感できる。

腐った棕櫚の木を過ぎた所で、私はまたしても象を追うことを中断しなければならなかった。放射線技師の女だという噂のある三病棟の付添婦がいきなり立ちふさがったからである。

何をしているんですか。もう皆さん集まっていますよ。掻爬でもしてきたかと思われるような、顔色のわるい付添婦は横柄な口をきいた。

集まり……。

一昨日の事件ですよ。わかっているじゃありませんか。ぐずぐずしてると疑われても仕方がな

いから……。

集会所に行くと、すでに事務局長が喋りだしており、職員や医師たちの背後に、珍しく副所長の姿も見えた。何時もなら時間に遅れた者には殆ど全員から露骨に難詰する視線が注がれるのだが、誰も振り返らなかったのは多分そのせいかもしれなかった。同じ集会所でいつか、副所長が気まぐれに声をかけてきたことから、幾分わたしに対する贔屓をうんぬんする患者もいたのだ。

いうまでもないことでありますが、皆さんの特殊な条件と立場よりからして、当療養所はできる限りの……何と申しますか、皆さんにはできる限りの自由な時間を与えている、そのような配慮をしているのではあります。もっとも適切な治療。これはもちろんのことでありますが、当療養所は設立者の大方針に依りまして、できる限り、そこに人間的な自由を……これはわたくしが申し上げるまでもないことでありますが、所長、副所長をはじめ、先生方の適切な方針とご処置によって、皆さんに、その……できる限りの自由を与える、自由な時間を過ごしていただくというのが、建て前になっておるような次第です。それで、その、何といいますか……簡単率直にいいますと、一昨日のような事件が発生致しますと、この自由な時間、そういう大方針といえどもこれを変更せざるを得ない。一昨日だけではなく、一カ月ばかり前には皆さんご承知の、週刊誌に対する電話投書事件なども起こっておるわけです。……何と申しますか、この際はっきりいいますと、一昨日の事件は明らかに当療養所を批判し、愚弄したものである。そうでしょう、皆さん。

いうまでもないことだが、あれは普通の落書きといったものではない。この療養所が開かれてから、すでに七年の年月が経っておりますが、こんなことはこれまで一度もなかった。こんな破廉恥な事件はこれまで一回も発生しておらんのですよ。そこのところを充分考えてもらいたい。職員の間には、誰があのような破廉恥な画と文章を食堂の黒板に書いたか、この際徹底的に糾明して、場合によっては警察の手を借りてもよい。そのような意見もでた次第ですが、まあ今回までは穏便に取りはからうよう所長の、これは副所長も寛大なご意見であったのですが、今度だけはまあ、当療養所だけの問題にとどめておこうという寛大なるご処置になった次第であります。わたくしの申し上げることはわかりますね。わたくしたちは決して皆さん方を特別の、何と申しますか差別の考え方で見ておるわけではない。それがまた当療養所のモットーでもあるわけですが、わたくしたちは皆さんに対して全く対等の……何と申しますか一対一の人間だと考えておるわけです。しかしやはりそこには治療する側と治療される側の、正しい秩序というものが必要である。これはわかりますね。それを破壊しては根本の人間関係が崩壊してしまう。そこのところをよくよくききわけていただきたい。これ以上、もうとやかくは申しませんが、二度とこのような不祥事が起こった時の場合を充分考えて……繰返しますが、皆さんの自由な時間を決定的に削除してしまうというような、不幸で悲しむべき事態にならないよう、よくよく反省してみて下さい。具体的にいいますと、今後このような事件が起きた場合、当療養所は警察の手を借りてでも、徹底

的に犯人の糾明に乗りだします。連帯責任として皆さんの自由な時間を今までの半分に制限してしまうかもしれない。或は三分の一か四分の一にしてしまうことだってあり得る。いいですか、皆さん。誰がやったか、もし知っていたら、事務局まで届けて下さい。むろんその人の名前は絶対に表には出しません。今後、そのような動きがある場合でも知らせてくださるよう……ええと、くどくどとはいいませんが、はっきりいっておきますと、今度の事件の犯人は大体判明しておるんです。チョーク、白墨の筆跡を鑑定すればそんなことは一目瞭然だ。しかし、今回に限って、あえてそれは伏せておくことにしました。その代りその人には充分反省していただく。わかりましたね。今度の事件に限ってですよ。所長、副所長はじめ先生方の寛大な処置を忘れないでいただきたい。ええと、申し忘れましたが、一昨日の事件のことはどのような形でも外部には洩らさないで下さい。これは皆さんのためですよ。一対一の人間として、これは重ねて頼んでおきます。いいですか、外部に洩らすと皆さんが笑われるのですよ。皆さんが恥辱を受けるわけです。……ではこれで終りますが、今日の夕食には、特に所長、副所長の配慮で西瓜がだされることになっております。わかりましたか。本来なら徹底的に糾明して、犯人が名乗りでるまでは皆の責任ですから、食事抜きなどという処置も考えられないことはないのですが、これはまあ、わたくしもきいた途端びっくりした位の、サービスなんですよ。……

患者たちはそこで、隣の者の口を引き継ぐようにして、ざわざわと笑った。サービスなんです

よ、という言葉がおもしろかったのだ。私が前列の椅子に坐っている同室の男の耳に口を寄せて、あれでくだけたつもりなんだよ、と囁くと、しえっという声をだした。

事務局長の威しと賺しとまぜこぜにしたまやかしの言葉はまだつづいたが、私はもうきいていなかった。前列の男は片方の手でしきりに耳たぶを掻いていたが、しゃっくりがでているらしく、間をおいて大袈裟に体をゆすった。やがて事務局長の話は終った。二、三人の者が場違いの拍手をしたが、周りの視線に射すくめられたようにすぐ打ち止めた。患者たちは夫々立ち上がり、私も椅子を後に引こうとした。するとまたいつかのように副所長が真直ぐ私の方へ近づいてきたのだ。

種村さん、僕の部屋にきて、一緒にお茶を飲みませんか。

秋谷医師に従って、私は妬ましそうな顔々の前を通った。彼が患者をお茶に誘うのは、機嫌のよい時に行う気まぐれの治療だということを誰もが知っていたが、それでも名指しされるチャンスは滅多にないのだ。秋谷医師は副所長室に入ると、自分でコーヒー沸し器を整えながら、気楽にして下さい、とソファをすすめ、所長がああいうふうだから、どうも雑用ばかり多くてね、とひとりごとのようにいった。所長がああいうふうというのは、噂の通り、夫人との間に起こっているという離婚沙汰か。

どうですか。この頃仕事は順調ですか。

仕事といいますと……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

確か、「演出」という題の小説を書いておられたでしょう。

ああ、あれは失敗しました。作中に使用する劇の処理がうまくいかなかったんです。第三章の舞台稽古の場面で、女優ではないが、特にその上演のために選抜された女事務員が、自分の性生活を赤裸々に告白する個所があるのですが、そこの部分がどう書いても通俗的なものに傾斜してしまうのです。まだほかにもいろんな原因が重なって、途中で放棄することになりました。

それは残念ですね。ユニークなテーマだと思っていたのに。

此頃は何でも、書いている途中で、主題がふっと風船みたいに浮いてしまうんです。軽やかな文体というなら、また話は違いますが、自分の創りだす人間たちが、何だか軽薄に見えてきて仕様がない。書いているうちにそうなってしまうんですね。しまいには渦の場景までがなんだかハイキングみたいになってしまう。この前は誰も人間のいない辺境を……ただそれだけを書いてみようとしたんですが、……鴉だけの飛ぶ夕暮の暗い渦に赤いランドセルを背にした少女がひとり、何処にあるのかわからない、そこからは見えない部落に帰って行く。そこまではよかったのですが、傾いた船小屋からでてきた老人のところでもう駄目になりました。あの場合は老人などださずに、少女ひとりだけにしておけばよかったんです。赤いランドセルだけで、渦の重さには充分拮抗できるはずですからね。それを、欲をだして、老人の肩先に鴉までも止まらせてしまったものだから、これじゃもう上滑りになるのが落ちです。もし鴉をだすのならコンクリートの枠

を板壁で囲ったような、夏場だけ開く食堂の中にでも飛ばせればよかった。夏場だけだから、その時分は誰も住んでいないんです。梱包した荷物の上に一羽の猫みたいにずんぐりした鴉がじいっと蹲っている。……

なかなかいいな。なぜそれを書かないんです。

何だが嫌らしくなったんですよ。

嫌らしい。どうしてまた。

どうしてだかわかりませんが、そういう気分になってしまったんです。鳥の不気味さを書きたいのなら、例のダフネ・デュ・モーリアの作があるし、ブルーノ・シュルツにだってすばらしい断片がある。どちらも冬の日が始まる描写から書き起こしているのが奇妙な符合にもなっているんだけど、鳥を書くのなら、そこまで自分に引きつけなければいけない。シュルツの父は……いや、これは作中の父親ですが、屋根裏部屋で鳥を飼っているんですよ。そして、これはと思う鳥を暗がりでめあわせるんです。しまいには遠い国からありとあらゆる種類の鳥がやってくる。人間を襲うデュ・モーリアの鳥よりもシュルツの鳥は人間に近いだけ、いや人間そのものであるだけに余計恐いんです。目をつぶってじっと眠っていたりするんですよ。

鳥が好きなんですね。

いいえ、嫌いです。あんな気色のわるい奴はない。

じゃ、どうして鴉なんかを書こうとするのかな。

だから書こうとしても書けないんですよ。あ、わかった。急に嫌らしい気分になったのはそのためなんだ。

最近はよく眠れますか。

ええ、睡眠時間いっぱい眠れる時もあり、全然寝つけないこともあります。この際、お願いしておきますが、夫々症状の異なる患者を一定の睡眠時間でしばるというのはどんなものでしょうか。明方まで寝つけない者に、七時に起きろといわれても、それは残酷というものですよ。

秋谷医師はそれに答えず、沸し器のコーヒーを二つの碗に注ぎわけた。彼の背後には誰の作とも不明な版画のどんよりした河岸がかかっており、横手の窓を通して、かすかに灰色の海が見えた。壁に飾りつけられた馬蹄型の金属の下に、紙で作られた薔薇が幾本か咲き乱れ、少し体を傾けると、海のかわりにあの穢ない棕櫚の葉が視界に入った。秋谷医師はコーヒー碗を私の前におくと、なんだかじめじめするな、といいながらクーラーのスイッチを廻した。

昨夜、老人ばかり住んでいる村の夢を見ました。ずっと向うに軍艦のような形をした島の見える海辺にその部落はあるんです。昔は漁村だったのか、破けた網が網干棒の先に旗みたいに垂れ下がっているんですよ。そこに大きな腹を抱えた裸足の女がやってきて、その後を老人たちが見え隠れに尾行して行くんです。

睡眠時間のことから、秋谷医師の顔色が変ったように思えたので、私はでまかせの夢をでっち上げた。とにかくそれらしい夢の話をすると彼はひどく気に入るのだった。まるで自分の研究している生半可な治療法の適応症例でも発見したかのように。案の定、秋谷医師の口調は張りを戻した。

ふーん、老人ばかりの村というのはおもしろいな。それで、なぜそんなふうになったんだろうね。以前、そこに養老院か何かあったんではないでしょうか。私は秋谷医師がよろこぶような言葉を並べた。目が醒めたあとで漠然とそんなふうな気がしました。そんな辺鄙な村に養老院があったというのは妙な話ですが、あとで考えたのではなくて、夢の中からずっとそう決まっていたような感じでした。

養老院ね、なるほど。

養老院はとうの昔につぶれているんですよ。ですから現在残っている老人たちは、何処にも行き場がなくてそこにいるんです。

それも夢ですか。

自分でもよくわからないんです。夢を見ているうちのことか、それとも目が醒めてからそう考えたのか。

妊婦の跡を老人たちがつけているといいましたね。

ええ、それははっきり顔かたちまで覚えています。西瓜を腹の中に抱えたような女は、背が低くて平べったい顔をしてるんです。口のまわりに瘡蓋がいくつもできていて、そのくせどことなく色情的な感じが漂っていました。

口のまわりに瘡蓋ができている。それは何か、性的な病気でも暗示しているんですか。

そうかもしれません。ただ、わたしはその時……

その時、どうかしたんですか。

ついでによろこばせてやろうかと私は思う。しかしあまり図に乗ると秋谷医師はかえって不機嫌になる恐れがある。私は警戒しながらなるべく声を抑制した。どうも未だにおかしな具合ですが、その腹の大きい女を尾行している老人が自分自身のような気がしているんです。

ほう、あんたが老人だった。その妊婦をつけていた老人があなた自身であったというんですね。夢をみている間はそうでもなかったんですが、あとでだんだんそういう気分になってきました。なんだか、夢と現実の限界がぼうっとしていて、曖昧でよくわからないんです。

あなたは老人だった。それで、妊婦を尾行しながら、何を考えていたんですか。何を目的にして妊婦の跡をつけていたんですか。

それは……

もう少し秋谷医師をくすぐってやってもよかったが、突然馬鹿らしくなってきた。私は目をつ

ぶって頭の中のことがうまく言葉にならないようなふりをし、ああとかすかに溜息を吐いた。

どうかしましたか。

いいえ、何でもありません。私はいう。話をどんなふうに持って行けばよいか、と考えながら。何だか辛くなってきたんです。いや、辛いという感じともちょっと違いますが、息がかすれるんです。咽喉のあたりがぜいぜいして。……年寄はこんなふうにいつも息苦しいものでしょうか。

秋谷医師は顎をあげてあらぬ方を向いた。しまった、いい過ぎたのかもしれないと思いながら、私は碗の底に溜ったコーヒーをすすり、視線の幾分かを穢ない棕櫚に走らせた。ノックの音がきこえて、博労看護婦が入ってきたのはその時である。彼女は私を見ると、秋谷医師の傍まで近寄って、何やら囁いたが、帰りはまるで私の存在を無視した。この地方には、特別馬にゆかりのあるわけでもないのに、博労という姓が多く、三カ月前に失踪した看護婦も博労シノという名前だった。

実をいうと、彼女が行方をくらます一週間ばかり前、私は博労シノと交渉を持ったことがあるのだ。交渉といっても特別にどうかしたというのではなく、食堂近くの内庭で偶然行き合っただけだが、奇妙なことに彼女の方から声をかけてきたのである。

昨日の朝、食堂でこさえた味噌汁はみんな捨てたんですよ。浅蜊がみんな腐っていたんです。海からすぐ運んだっていうのに、おかしな話ですよね。

潮の加減でもわるかったんじゃないかな。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com